

教員自らが主体的、対話的に取り組み、深い学びを得る校内研修

～「効率的」で「効果的」な授業づくりをめざして～

静岡大学教育学部附属特別支援学校

1 はじめに

ラーニングピラミッドで示されているように、「学び」とはアウトプットすることで定着すると言われている。(出展: Learning Pyramid アメリカ国立訓練研究所) 私たちも、一生学び続ける教員である。この度の学習指導要領改訂で重点として示された「主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニング)」の視点を我々教師自身の学びに生かしてみたらどうか。獲得した新しい知識を、互いに伝え合い、高め合うことで「深い学び」につながり、学習者としての子供の気持ちにも沿えるのではないか。

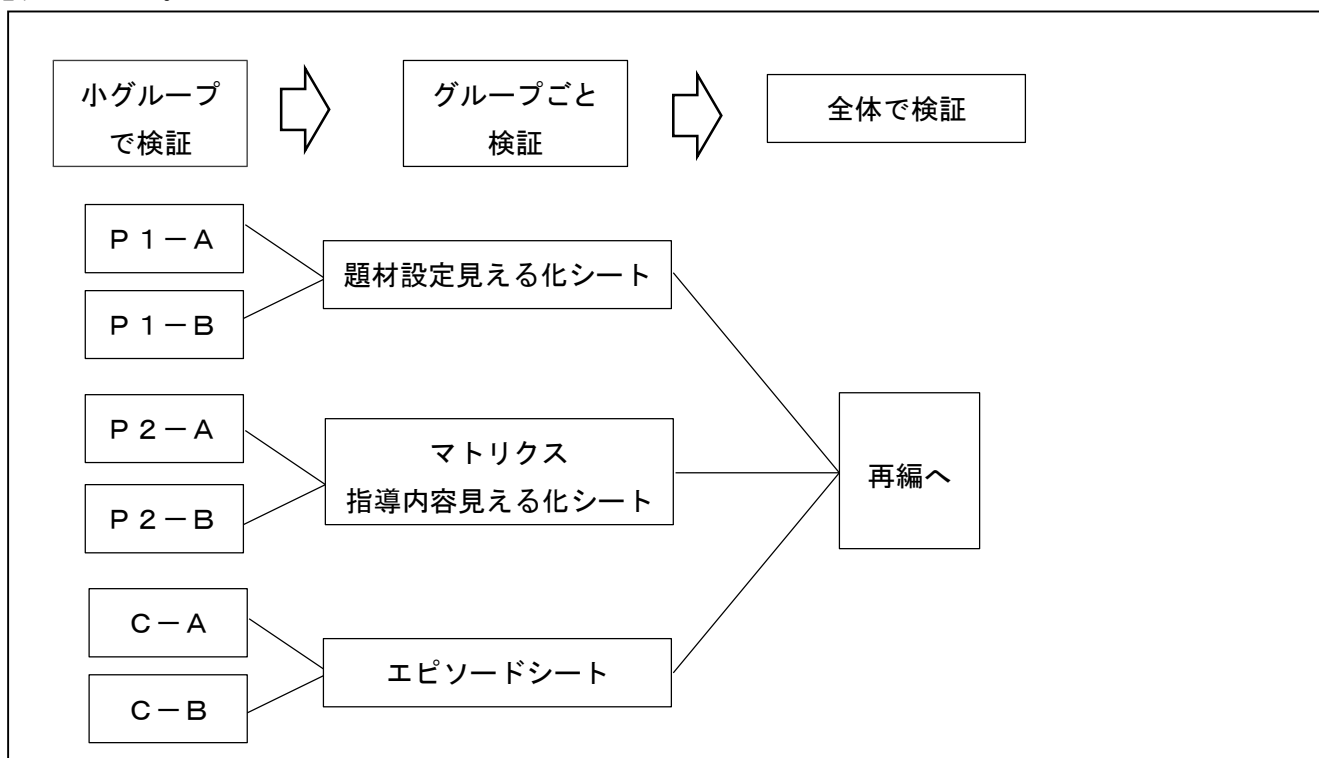
一見相反したこの二つの目標を同時に達成する方法はないか。たとえば、教育学部の附属校として多くの時間を割いて取り組んでいる教育研究が、惰性や受け身の研究となるのではなく、教員一人一人が主体的に取り組むことのできる、研修の場としても最大のパフォーマンスを果たすことはできないか。今回、研究部として教育研究と教員研修が効果的に同時に進められる方法の画策を目指して、実践に取り組むこととした。

2 実践の経緯

(1) 教員一人ひとりの興味関心に応じて担当を決定

今年度の縦割りグループ編成は、プロジェクトを結成し、昨年度まで使用していた授業づくりのためのシートを検証する取り組みを行うこととした。全校の教員にどのシートを検証したいかアンケートをとり、一人一人が検証を希望するシートの担当となった。さらに、担当するシートのグループを二つに分け、小グループでの話し合いの後で徐々に大集団での話し合いへ広げていくことで全員が参加できる体制をねらった。

また、シートの目的を明らかにすべく、それぞれをPDCAのサイクルにあてはめた。図5のようにグループ名と目的を決めて、昨年度まで在籍した(実際に使用した)教員からは使い勝手について意見を出し、今年度転入した教員からの客観的な評価を、それぞれの立場から伝えあって検証を進めた。表1の検証のポイントに沿って、どのグループも活発な話し合いがなされ、図6の話し合いの結果を記入するメモには、書ききれないほど多くの意見が並んだ。



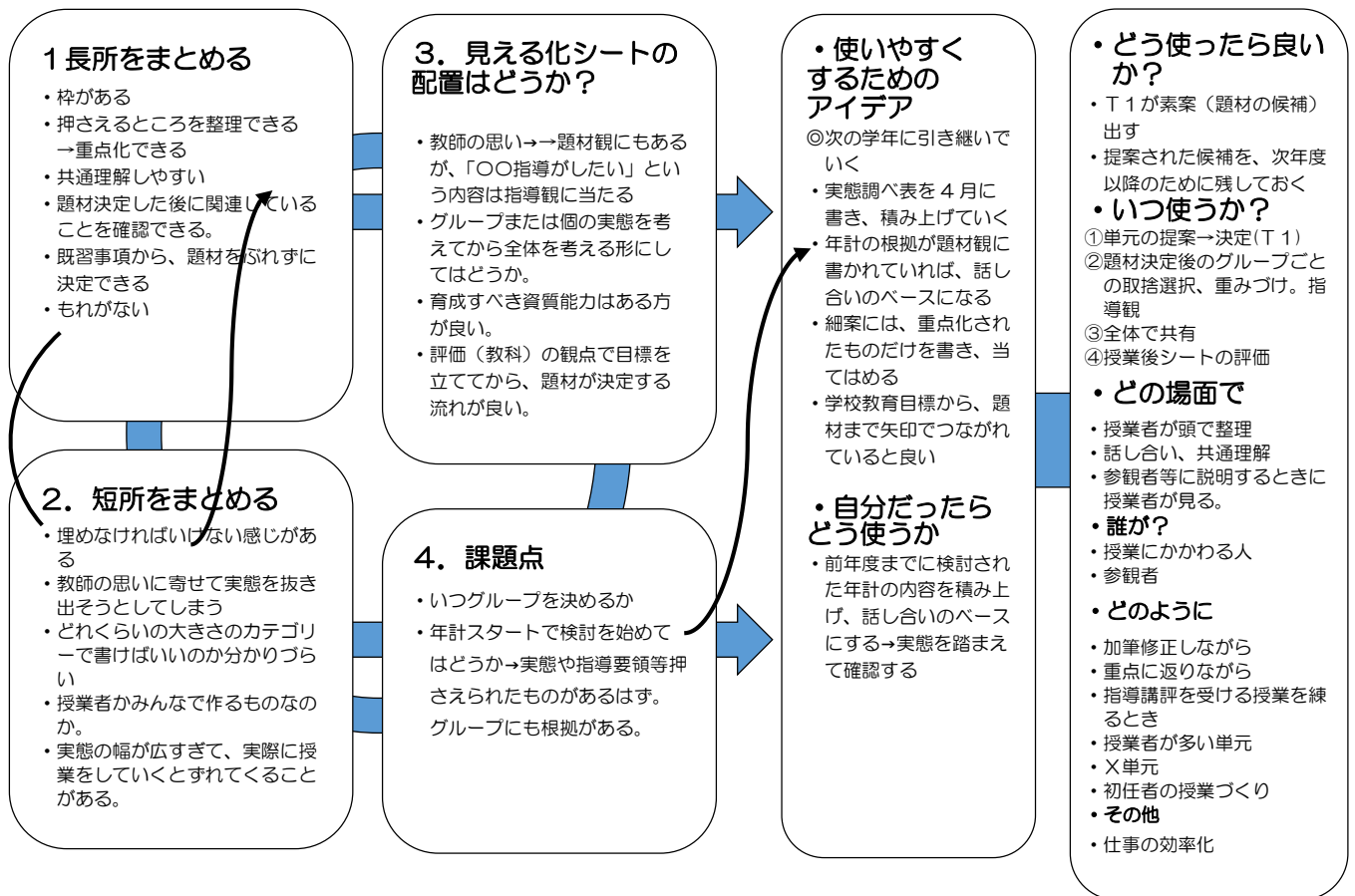


図 話し合いの過程（P1-Aグループの例）

### 3. 今後の展望

今後も、本校の教育研究は続いていく。今回、シートを作り出す過程で、どのグループからも目的の一つに「効率アップ」「働き方改革」といった言葉が挙げられていた。これらのシートは、あくまで授業づくりを効率的に行うためのツール（道具）である。シートに記入することで業務が多忙になるようでは、本末転倒である。ツールをうまく使って、効率的に効果的な授業づくりができることを目指したい。

また、今後は、多くの教員が他校の研究協議会や学会等へ積極的に赴き、我々の生み出したシートの良さを再確認するとともに、課題点を改善するヒントを得られるようにしたい。そして、教員同士の話し合いの環境を設定せずとも、今回のつながりを元に、日々の教員同士の自然な関わり合いが続いていくことを願う。教員同士のつながりが、私たちの目指す授業づくりの礎であることを再度意識して、この良好なつながりをさらに強固なものにしていきたい。

参考文献：静岡大学教育学部附属特別支援学校研修集録 22 「児童生徒一人ひとりの確かな学びを育む授業づくり～授業のねらいと指導内容の明確化を通して～」